

実践のまとめ（第5学年 外国語科）

長岡市立黒条小学校 教諭 尾形 瑞希

1 研究テーマ

既習表現を活用しながら、相手意識をもって主体的に表現しようとする児童の育成

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

学習指導要領では、「外国語における見方・考え方を働かせ、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」と示されている。さらに、小学校段階では相手の発する外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、もっている知識などを活用して他者に外国語で自分の思いを伝えようとしたりする体験を通して、言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを改めて感じる事が、言語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で重要であるとされている。

自身の実践を振り返ると、「できるだけ英語で話す」ということを大切に、既習表現を活用することを意識して単元づくりや日々の授業に取り組んできた。担当する学級では、授業の中で獲得した表現や生活の中で獲得した表現を駆使して、伝えたいことをできるだけ英語で話そうとする児童が多い。児童の振り返りには、「今まで練習してきたことが言えてよかった。」などの記述が多くあった。一方で、やりとりの中では、自分の話した英語が相手にしっかり伝わったかどうかまで意識できていないことが課題である。相手の状況を確認めたり気にかけてりする意識付けが足りなかったためであると考えている。

そこで、相手意識を高めるような工夫をしながら、より主体的に児童に表現力をつけさせたいと考え、本研究のテーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 教師のスモールトークによるよいモデル提示と段階的な言語活動

帯活動として教師のスモールトークを行い、児童にとって関わりのある先生方の紹介を提示する。その際、既習表現と併せて児童も紹介時に使えるような表現を織り交ぜ、その使い方に気付かせる。また言語活動の発話量を徐々に増やし、ペアやグループなど形態を変えながら、自分の思いや、友達の事について話す言語活動を計画的に設定していく。

② CAN-DO リストとレスポンス

毎時間の活動の振り返りのために、児童に Can-do リストを配付する。児童に身に付けてほしい力を4技能ごとに示し、各項目に対して自分がどの程度できたか自己評価をさせ、本単元で目指す姿を意識させる。よりリアルなやりとりになり、即興的にコミュニケーションがとれるように活動を設定する。インタビューシートを作成するなどし、会話の流れや状況、相手の返答に合わせた表現を活用できることを目指す。

(3) 研究テーマに関わる評価

相手意識をもって主体的に表現しようとしている姿を評価するために、児童の振り返りシートから意識の変容を見取る。また、授業の中で撮影した動画と最終回のパフォーマンステストでの姿を比較する。相手を意識して発言できているか、より伝わるようにジェスチャーなどの工夫をしているか見取る。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

Unit 4 He can run fast. She can do Kendama. (Here We Go! 5 光村図書)

(2) 単元(題材)の目標

相手を意識しながら、既習の表現を使って、より自然なコミュニケーションが図れるように工夫して友達紹介をすることができる。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〈知識〉 Can you ~? He/She can/can't~. などの表現や関連語句を理解している。 〈技能〉 人ができることやできないことについて聞き取ったり話したりする技能を身に付けている。	友達のことをよく知ったり意外な一面を伝えたりするために、簡単な語句や基本的な表現を使って話している。	友達のことをよく知ったり意外な一面を伝えたりするために、簡単な語句や基本的な表現を使って話そうとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全 8 時間、本時 7 / 8 時間）

次 (時)	○主な学習活動	帯 活 動	評価			
			知 技	思 判 表	主 体 性	評価方法
1 (3)	○ストーリーをみて、学習する内容をつかむ。 ○単元のゴールや CAN-DO リストを共有し、学習の見通しをもつ。	○			○	
	○できることを尋ねる言い方を知る。 ○録画①：自分のできることや、できないことを紹介する動画を撮影する。	○	○			動画(記録に残す評価)
	○できることを尋ねる言い方を知る。 ○友達のできることを予想して、できることを尋ね合う。	○	○		○	ワークシート
2 (4)	○自分以外の人の「できること」「できないこと」を伝える言い方を知る。	○	○			
	○ALTのマイケル先生のできることを予想し、尋ねる。 ○録画②：分かったことをもとに、マイケル先生の紹介をする。	○	○		○	CAN-DO リスト を用いた振り返りワークシート

	○「できること」「できないこと」の表現を復習する。 ○オリジナルインタビューシートを作成し、友達にインタビューをする。 ○インタビューで使えるレスポンスの表現を確認する。 ○録画③:インタビューで分かったことともに、紹介動画を作成する。	○		○	○	CAN-DO リスト を用いた振り返り動画(記録に残す評価)
本時	○既習表現などを追加して、インタビュー用紙を作成する。 ○よりよいインタビューの仕方や表現について考える。	○	○	○	○	動画(記録に残す評価) CAN-DO リスト を用いた振り返り
3 (1)	○友達紹介を発表する。	○		○	○	パフォーマンステスト CAN-DO リスト を用いた振り返り

4 単元と児童

(1) 単元について

Unit 3 までは、自分の名前のスペルや好きなもの、誕生日や理想的な時間割など自分のことや考えを伝える表現を学習した。本単元では、自分以外の友達のことを紹介する表現を学習する。

5年生になってクラス替えをしてから半年が経ち、クラスの友達について少しずつ分かってきた子どもたちである。できることやできないことのインタビューを通して、友達についての新たな情報や意外な一面を見つけたり、自分との共通点に気付くことによって、英語でのコミュニケーションを楽しみながらより一層仲を深められるようにしていきたい。

(2) 児童の実態

これまで、進んで学習に取り組む様子が見られた。自己紹介をする活動では、習った表現を使って楽しそうに英語で発表し合う姿が見られ、外国語の学習に好感をもっている児童が多い。また教師やALTのスマールトークや英語での指示も、何と言っているのか理解しようと粘り強く聞くことができた。

しかし、やりとりの中で会話の流れや状況を確認めたり気にかけてりする意識付けが足りなかったために、言語活動では一方的に英語を話すだけになっている。自分の話した英語が相手に伝わっているのか、確認しながら話せるようになると、よりリアルなコミュニケーションになることができる。

本単元では、友達の意外な一面を紹介し合う活動をゴールに設定している。教師対児童のコミュニケーション時と同様に、児童対児童のコミュニケーション時にも互いに理解しよう・理解してほしいと意識がもてるよう指導していく。インタビュー活動を通して知り得た情報を、聞いている人を意識しながら工夫して話そうとする児童を育てていきたい。

5 本時の展開 (令和6年9月27日実施)

(1) ねらい

レスポンスを返すことを意識しながらインタビューし、分かったこととともに、紹介動画

をつくることができる。

(2) 展開の構想

導入時では、インタビュー活動に関してこれまで全体で確認してきたポイントを振り返る。ただ質問をするのではなく、英語でのやりとりを楽しみながら行い、できるだけ多くの情報を聞きとることが目標であることを確認する。

展開時では、インタビュー時にレスポンスを返すことがより意識できるように、児童のタブレットにカードを貼り付けた状態で活動する。相手の返答や会話の流れから、英語でのやりとりを増やし、英語が話せるという実感を得られるようにしていきたい。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働きかけ 予想される児童の反応	□評価 ○支援 ◇ 留意点
導入 (7分)	- あいさつをする。 - 基本的な表現や語句を復習する。 ◎インタビューを成功させるには？	曜日、日付、天気のスぺルを英語で質問し児童は英語で答える。	○学習の流れをまとめたスライドをモニターに映し学習を振り返る。
展開 (33分)	- スモールトークでやりとりのモデルを示し、前回見つけたレスポンスの表現を確認する。 - 意見を集約し、インタビューのこつをおさえる。 - レスポンスカードを配付し、紹介と練習をする。 - ペアを組んで質問事項を考え、インタビューをする。 - わかった情報から紹介する内容を選び、紹介動画を撮影する。	T: 英語のやりとりを増やすには、どんな英語を使ったらいいでしょうか。 S: 答えてくれたら、Niceとか言うといい。 S: Really? も使えそう。 S: けん玉はできそうだけど、スノーボードはできるかな。 S: Good とか使うようにしましょう。	○前時までに見つけたレスポンスをまとめた紙を黒板に貼る。 ◇レスポンスカードをタブレットに貼り付ける。 ○話し方のコツをモニターに映す。
まとめ (5分)	本時の振り返りをする。		□CAN-DO リストで振り返りができる。

(4) 評価

- ・基本表現をつかって、インタビューすることができる。(知技)
- ・相手の返答を聞いて、反応を返そうとしている。(思判表)
- ・CAN-DO リストを使って、本時の様子を振り返ることができる。(主)

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際（指導の実際）

① 単元のゴールを共有し、児童と共に目指す姿を考える

まず、本単元の終わりにはどんな姿を目指すのかや、最後にする活動について児童と共有した。新しいクラスになって半年が経過した中で、どんな友達紹介をしたら楽しくできそうかを全員で考えた。「ただやるだけでは楽しくない」「(みんなが) 知らないことを紹介できたら面白そう」など前向きな発言が上がった。みんなが知らない情報を得たり友達の新たな一面を見つけたりするためにインタビューをすることを意識させることで活動への意欲が増した。その上で、教科書の内容理解や新出表現の練習をした。

② 楽しい友達紹介にするための一問一答ではないインタビュー活動

次に、前時までで学習した内容を使って、インタビューの練習をした。最初は本単元で習う表現（Can you～？）に限定し、徐々に本当に聞きたいことを質問に混ぜ込みながら繰り返し行った。その中で、楽しいインタビューにするにはどうしたらいいのか考えるようにした。児童は今までの経験から相手が答えてくれた後に、何か英語を返したらいいのではないかと考えた。そこでデジタル教科書を見直し、今まで出てきた表現を集めた。集めたレスポンス表現から特に児童が使いやすいものを選び、小さなカードにまとめて配付した。（図1）活動の時には、児童が手に持っているタブレットにカードをつけ、よりレスポンス表現を意識できるように工夫した。

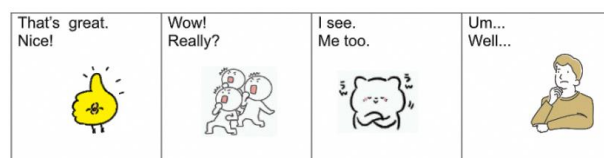


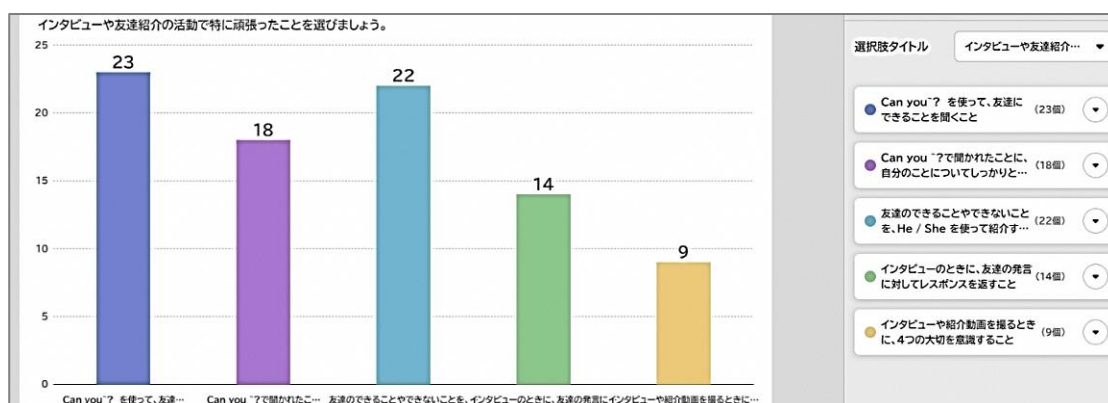
図1 レスポンスカード

また、インタビューをして分かったことを整理して紹介動画にする活動も行った。ここでも、分かったことをどの順番でどのように話したら、インタビューした相手が楽しくなるかを考え、繰り返し活動を行った。

(2) 研究テーマにかかわる評価

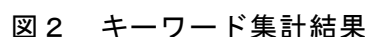
研究テーマに関する評価結果は以下のとおりである。（表1）

表1 児童の振り返りシートの集計結果



アンケートの結果、本単元で学習した Can you～？を使って友達にインタビューしたり、分かったことを He や She を使って紹介したりすることができたと回答する児童が多かった。インタビュー活動を繰り返し行った結果、本単元で理解させる表現をしっかりと習得することができた。だが、インタビューの時に友達の発言に対してレスポンスを返すことに関しては、「できた」と答えた児童はクラスの半分程度だった。その要因の一つに、既習表現を取り入れすぎたことが考えられる。本単元では can を主に学習するが、児童がインタビューで聞きたい

また児童の書いた振り返りをキーワード集計した結果が、図2である。インタビュー活動では相手を代えながら繰り返し行ったことで、「できるようになった」という記述が多くみられた。さらに、「4つの大切」(アイコンタクト、クリアボイス、ジェスチャー、レスポンス)を意識できたという記述も多く見られ、肯定的な記述が多かった。一方で、レスポンスがあまりできなかったという児童も一定数いた。場面や表現の幅を限定して、よりリアルなコミュニケーションに近づけるように工夫が必要である。



① 単元で扱う主な表現について

次時、扱う表現を限定して再度インタビュー活動をした結果、本時よりも英語でのやりとりにより余裕があり、レスポンスの言葉が増えたようだった。よって、単元のゴールを設定し何のために誰に向けて話すのかをあらかじめ考え、扱う種類や量を決めていくことが大切である。

本時を迎えるまでに児童は、既習の内容から使えそうな表現を探し使おうとしていた。特に使う頻度の高いものでは、“Me, too.” や “Nice.” などであった。だがインタビュー相手の返答が “No, I can’t.” だった場合はそれが使えない。正確には “Me, neither.” を使うべきだが、小学生が使いやすいフレーズではない。自分も “No.” の場合には “We are friend.”

（一緒だね）というような身近な表現を使ったり、握手したりするのも児童が使いやすいフレーズとしてよいと考えた。小学生段階では英語の語彙が少ないので、正確さよりも英語を話すことの楽しさを重視していきたい。外国語であるからこそできるコミュニケーションの楽しさを十分に味わわせていけるようにしたい。

文部科学省,『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』,開隆堂出版株式会社,2018